

プールではできたのに

品川区立西大井保育園（東京都品川区）

[5歳児]

＜背景＞

狭い園庭環境やのびのびと体を動かす経験の少ない子どもたちの実態から、室内でも子どもたちが自ら積極的に十分に身体を動かして遊ぶことができるよう、園独自の「西大井運動プログラム」を実施している。子どもたちにとっては“忍者の術や修行”という遊び文化になっている。

＜子どもの姿＞

水遊びも後半に入り、水中で目が開けられるようになったり、2人組になり、潜って「水中ジャンケン」をしたり、バタ足で泳ぐことを楽しんだりしている。また、「忍法だるまの術」「忍法イルカの術」など、プール遊びでの術の名前を考え、『忍法○○の術』といいながらポーズを取り、いろいろな術を見せ合い教え合って遊んでいる。

事例1 「ぴょんって、跳ねるんだよ】

[子ども=C 保育者=T]

〈プールで〉

C：「忍法片足上げの術！」

T：「すごい。シンクロみたいだね」

C：「シンクロって何？」

T：音楽に合わせていろいろな動きをすることを話す。

子どもたちは、自分たちで♪ポーニョポーニョポニョ魚の子ー♪と歌い出した。自然と身体が動き、ジャンプをして腕を伸ばしたり、水の中で側転をしたり、だるま浮きから仰向けになったり、でんぐり返しをしたり、カエルのようにピョンピョンと飛び跳ねて遊ぶ。

C：「先生ーこれすごいよ！面白いの一」

T：「ほんとだー。面白い」

C：「本当にカエルみたいに跳べるよ」

T：「えっ本当に？先生も一緒にやってみましょう。あらっ、本当ね。面白いわね」

C：「先生、体がぴょんって上に跳ねるでしょう」

C：「体が軽くなった感じがするでしょう」

T：「そうね。カエルさんになった感じがするわね」

(分析 水の中で『カエル跳び』をすることで、身体が軽くなって飛びやすくなったことに気付いている)



〈翌日プールに入る前に〉

T：「昨日はカエル跳び、楽しかったわね。みんないろいろな術を考えているけれど、カエル跳びの術は部屋の中でもやっている術よね。水の中と両方でできるのね」

C：「あっ、そうだね。先生すごいねー。よくわかったねー」

T：「うーん、他にも両方でできる術があるかしら？って先生考えたんだけど、よくわからなかったの」

C：「あるよ！アヒルもカメもやってるよ。ワニも」

C：「えーっ、できないよ。ワニは足が浮いちゃうもん」

C：「あっ、そうかー」

T：「同じ術でも、水の中ではちょっと違う術になったりするのね。面白いわね」

(分析 「今までやってきた術が水の中でもできるかどうか」

「プールの中で考えた術は部屋の中でもできるかどうか」

ということに興味をもった)

お尻が
浮いちゃう…



事例2 他の術を、プールでもいろいろ試してみる

〈プールで〉

・クマさん…………「お尻が浮いちゃったから上手くできないよ」

・片足クマさん……「鼻に水が入っちゃうよ」

・カンガルー…………「ぴょーんって跳ねたから飛びやすいよ」

(分析 自分で無理だろうと思っていた水面のフープの中にジャンプして入ることができ、驚いている)

- ・カエル跳び………「ピヨーンってするから面白いよ」
- ・カエルの足打ち…「お尻がすごく上がったよ」（息は苦しいが高い位置で足打ちができる）
- ・物干し竿を使い前回り（くるくるの術）…「鼻に水が入ってやりにくいよ」
- ・物干し竿につかり横移動…腕や手の力が弱く雲梯ができるない子どもも、足が浮いて軽々とできる。
- ・物干し竿につかり豚の丸焼きで移動…身体が浮いて軽々と速いスピードができる。
- ・物干し竿を、水面につけた状態と水面から離した時の違いを試す。

水面につけた場合……「軽いよ、全然重くないよ」

水面から離した場合…「重くなった。さっきと全然違うよ」

(分析 身体が浮きやすすことによって、力のかかり具合の違いに気付き驚いている)



事例3 観覧車の術（物干し竿を使い、逆上がり）

〈プールで〉

- ・すでにできる子は竿が低いので、蹴り上げることはやりにくいと言う。
- ・できない子どもは、水の中では自然にお尻と足が浮き、逆上がりができる。

〈後日ホールで〉

- ・プールでできた「観覧車の術（逆上がり）」ができるかどうかを試す。足とお尻が十分に上まで上がらず、できていない。

C：「プールの時にはお尻が上がっちゃったから、腕が伸びなかっただんだー」

C：「○○ちゃん、できるよ。プールでできたんだもん」

T：「そうよ！腕を曲げて力を入れることがわかったから、きっとすぐできるわよ」

C：「そうだよ、○○ちゃんがんばれー」

(分析 度ども逆上がりを行うち、身体が浮かない原因が、地面の蹴り方（足の力）と、腕の引き寄せ方が重要だということに子ども自身が気付き始めた。まだ足や腕の力が弱いことも、自分で気付くようになっていた。他の動きも再度比較していた。)



考察

子ども自身が、プールの中で「楽しい」と感じた動きと、運動プログラムの運動とを比較し、同じ動きがあることに気付いた。子ども自身が考えることで、「他にも楽しい動きがあるかどうか、もっとやってみたい」という気持ちが生まれている。また、普段はできるが水中ではやりにくい動きがあったり、普段できなかったものが水中でできたりした感覚を体験したことによって、「どうしてできたのかな？」と違いを見つけようとしたことが、「次もできる！」と自信にもつながった。

子どもが「水の中でもできるのかな？」と疑問に感じたことを、予測を立てて試してみることで、考えてやってみるという経験をすることができた。そして、クラスの友達ができたことを素直に喜んだり、励ましたり、「すごい」と感心し合ったりするという認め合う気持ちが大きく育っていくきっかけになった。

ポイント

全身を使い「挑戦する」運動遊びに意欲的に取り組んでいることで、日常の動きと水中での動きの違いを実感し、自分の動きから生じた気付きを試したり疑問を確かめたりしています。体感したことを通して、水や水中の環境について感じたり学んだりしているので、友達の様子からも同様に感じたり学んだりする姿が引き出されています。「できる・できない」だけで運動遊びに取り組むのではなく、「どうして？」「どうしたらいい？」「どうなっているの？」など、次々に疑問や不思議を感じながら繰り返し取り組むことで、「科学する心」が育まれ、豊かな体験に結び付いています。